



公立大学法人島根県立大学広報誌
オロリン

ORO LIN



島根県立大学
The University of Shimane
2014.11 第3号

Vol.
03

公立大学法人島根県立大学広報誌 ORO LIN 2014年11月1日発行 編集・発行 / 島根県立大学 企画調整室 〒697-0016 島根県浜田市野原町2433-2 TEL.0855-24-2201 FAX.0855-24-2208 http://www.u-shimane.ac.jp/

学長×学生

本田雄一学長が語る 松江キャンパス

県大のホットな
今をお届け!



特集：国際交流
世界へ飛び出し
世界とつながる大学へ

学生活動紹介「doing」
個性あふれる活動を発信
学内外問わず活躍する県大生

国際交流センター始動。

大学 世界—地域 互いを結ぶ架け橋に。

平成26年10月、島根県立大学では、
大学と世界、大学と地域、そして、世界と地域との関係をより強化するため、
「国際交流センター」を開設しました。センターでは、様々な活動を行い、
大学、世界、地域での国際交流に力をいれていきます。

1 教育的・学術的ネットワークの拡大

海外大学との交流を促進、協定校を増やし、学生や教員の流動性を高める。

2 グローバルな人材育成

現代社会の諸課題に国際的視野からアプローチ
するため、学生に対して、異文化体験や留学の機
会を増やす(送り出し、受け入れの機会を増加)。

3 地域の国際化に貢献

自治体や国際交流団体との連携を深め、大学の持
つ国際ネットワークを地域と共有し、国際交流の
専門人材の活用や留学生の地域貢献を行う。

■お問い合わせ
島根県立大学 国際交流課
〒697-0016 島根県浜田市野原町2433-2
TEL.0855-25-9063 FAX.0855-24-2208

島根県立大学総合政策学会

第27回 **特別講演会** 入場無料

2014年12月12日(金) 15:00~16:30

◎会場 / 島根県立大学 浜田キャンパス 講堂



講師 宇宙航空研究開発機構
宇宙科学研究所 宇宙飛行工学研究系
かわぐち じゅんいちろう
教授 **川口 淳一郎氏**

演題 「はやぶさ」から伝えたい、
創る力の育て方

■お問い合わせ先：島根県立大学 企画調整室
〒697-0016 浜田市野原町2433-2 TEL.0855-24-2201

島根県立大学の取り組みや最新
情報は、ホームページでも配信し
ています。ぜひご覧ください。



島根県立大学
マスコットキャラクター **オロリン**

島根県立大学 検索

http://www.u-shimane.ac.jp/

島根県立大学はキャンパス内全エリア禁煙に取り組んでいます。

学生が気になる疑問をインタビュー 本田雄一学長が語る松江キャンパス

学長
×
学生



島根県立大学をもっと身近に感じてもらえるように、松江キャンパスの各学科を代表して学生3名が、本田雄一学長にインタビューをおこないました。



が、今年で41年目を迎えました。
学長 陶山さんが実行役員のリーダーを務めたんですよ。
陶山 はい！役員メンバー共々頑張りました。毎年約1500人の子どもたちが参加してくれませんが、今年はその人数も超える方々にお越しいただきました。
学長 それは素晴らしい。リーダーとして、歴史あるイベントを成功させたことが、今後の大きな支えになるでしょうね。私も数年前に観劇してもらいましたが、大人が観ても楽しめるものに仕上がっていて、とても感心しました。演者から裏方まで、すべて学生だけでやり遂げていることにも驚きます。驚くといえば、文科省の資料室に、本学のほいくまつりの写真が展示されていて、この取り組みが、国にも評価されているのだなあと誇らしく思いました。
陶山 それはすごい！嬉しいお話です。



今後の展望は？！
松江キャンパス4年制大学化に向けて
佐倉 そんな話題豊富な松江キャンパスも、4年制大学化のお話が出ていますが、今度どうなるのでしょうか？
 例えば、健康栄養学科の場合、卒業と同時に管理栄養士の受験資格(※3)が得られる4年制大学化のメリットは大きいと思っています。
学長 佐倉さんの言うように、資格の高度化が求められる社会になり、短期大学の2年間は取得が不可能なものもありますね。
三島 総合文化学科では、国語・英語の教員資格が取りたいという学生や、長期の海外留学を希望する学生も多いです。
学長 4年制の浜田キャンパスでは長期留学への取り組みも進んでいます。短期大学ではそれが難しいことは理解しています。現状では資格を取るための勉強が中心で、教養や人間力を養うような教育が、2年制課程では十分にはできません。また、資

なやかな雰囲気が始まったインタビューは、今回の会場となった「おはレス(※1)」の話題に移っていきました。

地域にしっかり根づいた
「おはなしレストランライブラリー」
三島 平成23年度から一般開放が始まったおはレスも、延べ約9千人の子どもたちに利用されています。
学長 今日は来館したお子さんたちの様子を初めて拝見したのですが、皆さん楽しそうに利用してくださっていて、本当にありがたいですね。この地域にしっかり定着していることが実感できました。
三島 文部科学省の支援で、図書館整備が実現したとのことですが、今後はどのようにしていくのでしょうか？
学長 大学図書館の「機能として維持していくことになるでしょう。そのためにも、絵本の拡充を含め、独自の存在として整備していくことが必要。図書館は利用していただかなければ意味がないので、そのための工夫が大事です。また、当初からの絵本の出張読み聞かせ活動がありますが、これをさらに充実させることで、今よりも広い地域の皆さんに理解していただけるものに成長させていくことも、地域貢献活動として意義のあることだと考えています。

今年プログラムも大盛況！
保育学科主催の「ほいくまつり」
陶山 地域貢献としては、私たち保育学科がおこなっている「ほいくまつり(※2)」



格にしても、今よりも上の資格も取って欲しい。ですから、そういった部分を実現するためにも4年制化に向けて取り組んでいるところなんです。ただ、すぐに実現できるものではなく、県立大学である以上、県民の要望に合致しているのか、等の検討を充分に行った上で整備していかなければなりません。
佐倉 今の学生の私たちにも影響があるのでしょうか？
学長 3年次編入や、再教育プログラムなど、在学生や卒業生の皆さんにとっても、プラスになる制度を考えているので、その際には是非とも母校に帰ってきて勉強して欲しいですね。
三島 陶山・佐倉 松江キャンパスの未来が楽しみです。本日はありがとうございました。

※1 「おはなしレストランライブラリー」の通称。P.09に詳細あり
 ※2 P.11に詳細あり
 ※3 短期大学の場合、管理栄養士の受験資格を得るには、卒業して3年間の実務経験が必要となる。

Cast プロフィール



松江キャンパス
 総合文化学科(2年)
 基町高校出身(広島県)
 みしま ゆうき
三島 悠希 さん
 疑問に思っていたことを直接お聞きすることができました。島根県全体に関わる大学の取り組みに、将来、私も何か関わられたらと思いました。



松江キャンパス
 保育学科(2年)
 大東高校出身(島根県)
 すやま まなみ
陶山 愛実 さん
 今まで間接的にしか知らなかった4年制大学化のお話を、学長から直接、また詳しく聞かせていただいたことで、大きな刺激を受けました。



松江キャンパス
 健康栄養学科(2年)
 沼田高校出身(広島県)
 さくら ちはな
佐倉 知花 さん
 短大にも良い面はたくさんありますが、自分の夢が一番近づけるのが4年制大学というのを実感しました。学長とお話できて本当に良かったです。



公立大学法人島根県立大学理事長
 島根県立大学学長
 島根県立大学短期大学部学長
本田 雄一

学生からのインタビューを通して、資格取得に直接結びつく教育を受けていることもあり、皆、将来に対する目的意識が高い印象を受けました。今後も、本学で学ぶ機会を大事にして、社会へ飛び出してほしいと願います。



公立大学法人島根県立大学 広報誌
オロリン

ORORIN
 島根県立大学
 The University of Shimane

contents 目次

- p 01 ▶ 学長インタビュー
- p 03 ▶ 特集「国際交流」
- p 05 ▶ キャンパス紹介・研究紹介
- p 11 ▶ 学生生活紹介「doing」
- p 13 ▶ News&Topics

Vol. **03**
 2014.11 第3号



世界へ飛び出し、世界とつながる大学へ 地域連携にも期待の「国際交流センター」

短期・長期の派遣留学や、海外からの留学生の受け入れによる、教育・研究面の活性化だけでなく、留学生との日常的な交流を通して、幅広く海外に通用する人材を養成する島根県立大学。こうした取り組みをさらに推進するべく、平成26年10月に設置された「国際交流センター」の役割や今後の展望等について、国際交流センターの小林明子センター長にお聞きしました。

センター設置に至った経緯と目的

国際短期大学を前身とする浜田キャンパスの場合は、国際交流に関する素地が以前からありましたが、県立大学となった現在、3キャンパスそれぞれのノウハウや特徴を活かして共通の取り組みにする。これまで以上に広く国際交流活動を展開していくためです。

センターに期待される役割とは

大きく3つの取り組みがあります。1つ目は「海外大学との交流促進」。海外大学としっかりした交流協定を結ぶことで、より良い留学環境を整備することにつながります。協定校が増えること

で、授業料の免除等、経済面の支援が可能になりますし、学術的なネットワークの構築も円滑に行うことができます。

2つ目は「留学生の増加」です。これは受け入れだけでなく、こちらから送り出す学生も含まれます。具体的には、韓国・蔚山大学校とのダブル・ディグリー制度(両大学の学位が取得できる制度)があり、平成26年度に1期生を送り出したところです。

3つ目の「地域・自治体との連携」は、海外の学生を約2週間受け入れ、日本語や日本文化を学ぶ機会を提供する、日本語・日本文化研修等を利用して、学内だけでなく、広く市民との交流を図っていくものです。子ども

たちとの異文化交流といった、他の教育機関との連携も含み、学校の総合的学習の時間や、高校のロングホームルームを利用した留学生との交流等、試験的ではありませんが、すでに始まっているものもあります。



留学生と地域の小学生との交流の様子。学内だけでなく、地域にも交流の場を広げる取り組みが進んでいる。

センターが標榜する人材育成

県立大学の大きな柱に、「地域貢献できる人材の育成」がありますが、ここに、国際交流で得た知識や経験を活かしていければと思います。

少子高齢化や環境問題といった課題に対し、「他国ではどう取り組んでいるのか」といった、国際的な視野を取り入れて解決できる人材を育成していきたいです。

いよいよ本格始動！センターの今後の展望とは

いろいろな取り組みがありますが、例えば、今夏行った夏期日本語・日本文化研修(※)では、4カ国の留学生が参加しました。次回、来年2月の研修では、参加人



国際交流センターセンター長 小林 明子 講師

数・国数ともにさらに増やしていきたいです。センターの設置により、出雲・松江キャンパスとの連携も円滑になり、これまで浜田キャンパスのみに限られていた研修先が県東部にも拡大することは、参加する留学生にとっても、島根県をより深く知るきっかけになると思います。この研修への参加が、本学への長期留学に繋がることを期待しています。また、こちらから送り出す学生たちに関しても、交流協定の強化によって、長期留学の機会が増えていくことを期待しています。

キャンパスごとの様々な取り組みを紹介!



1. CWUで言語クラスと文化クラスに分かれて講義を受ける学生。2.シアトルではマーケットを訪問し、市場の様子を見学した。



海外語学研修(サマープログラム)

平成2年からはじまり、今年で25回目となった海外語学研修(サマープログラム)。協定大学である、アメリカのセントラルワシントン大学(CWU)での研修に23名の学生が20日間の日程で参加しました。学生達は大学の寮に宿泊しながら、講義を受けたり、各施設見学や企業訪問、CWUの学生と交流をする等、アメリカでの生活を通して語学力を磨きました。



異文化理解研修(韓国)

昨年度から始まった韓国での異文化理解研修。今年度も、8月に8名の学生が参加しました。本学と交流協定を結んでいる啓明大学校、大邱韓医大学校では、グループワークを通して学生同士の交流を図ったり、医療施設の見学や鍼治療体験を通して現地の医療を学びました。そのほか、学生たちは韓国の茶道を教わる等、韓国文化の理解を深めました。



1.大邱韓医大学付属病院を見学中の様子。2.現地大学生とのグループワークの後、発表を行う本学学生。



バングラデシュでの海外活動報告

キャンパスを飛び出し、自ら積極的に途上国へ行き、その国の現状を知るための活動が続ける浜田キャンパス4年生の門上貴さん。門上さんは、バングラデシュに約1年間滞在し、インターンで現地団体「エクマツトラ」に参加。青空教室を開いたり、特技でもあるダンスを現地の子ども達に教える等、ストーリーチルドレンの支援活動をおこないました。



1.バングラデシュからの帰国前、送別会での集合写真。2.子ども達とダンスを踊る門上さん。

他にも行っている取り組みの一例を紹介!

以下の取り組み以外にも、各キャンパスで様々な活動が行われています。詳しくは、島根県立大学HPをご覧ください。

■ 学生交流

- 韓国・蔚山大学校日本語日本文化研修
- 韓国・培材大学校サマースクールに参加
- タイから学生が来学
- 太平洋諸国から学生が来学
- 日本語・日本文化研修(冬期・夏期)
- 異文化理解研修(アメリカ・韓国・ロシア・中国)
- 海外語学研修(アメリカ)
- 海外企業研修(インド・韓国・タイ)
- 中国・寧夏大学から学生が来学

■ 学術交流

- 島根国際学術シンポジウム2013
- 極東ロシアの今を知る公開セミナー
- イーストカロライナ大学交流シンポジウム
- 北京大学国際関係学院との合同国際シンポジウム
- 復旦大学国際問題研究院合同国際シンポジウム

■ 交流協定

- 韓国・大邱韓医大学校との交流協定の締結
- 韓国・培材大学校との交流協定の締結
- ロシア・海洋国立大学との学生交流協定の締結

※ P.14に詳細あり





ペルーの学生と交流する浜田キャンパスの学生。日本からは折り紙の折り方を、ペルーからは郷土料理の作り方を、それぞれ自国の文化について教えあった。



平成22年におこなった、アメリカの大学とのインターネット回線を使った初めての交流の様子。

この授業の目的を「互いの文化や考え方を理解して偏見をなくすこと」と言う江口教授は、「英語は国際共通語なので、正しさよりも、相手に伝わる英語力の教育を

相手に伝わる英語力を養いグローバル社会に対応する力を

が可能になりました。

今年夏、県内の高校生と米サンディエゴの高校生との交流でも成功を収めた江口教授。今後は、他の教育機関にもこの教育モデルを広げていきたいとのこと。

今年夏、県内の高校生と米サンディエゴの高校生との交流でも成功を収めた江口教授。今後は、他の教育機関にもこの教育モデルを広げていきたいとのこと。

学生たちにも好評で、簡単な英語のコミュニケーションが大きな自信に繋がるケースや、フェイスブック等を使った、持続的な交流に発展した学生もいるようです。



総合政策学部(浜田キャンパス)
江口 真理子 教授

■専門分野:ヨーロッパ語系文学・言語学
英語特別演習I・IIの科目を担当。ビデオ会議技術を使って、海外の大学との共同授業による異文化教育および言語教育をおこなう。

**他国の文化理解へと広げるICT教育
英語コミュニケーション能力の向上を目指す**

Research Report
研究レポート

ICT(情報コミュニケーション技術)を活用して、世界各国の大学生との交流を英語学習に取り入れ、学生たちの英語力向上だけでなく、お互いの文化を理解する教育にまで広がっていく教育・研究に取り組む、総合政策学部の江口真理子教授に、その内容をお聞きしました。

他国とビデオ会議技術で結ぶリアルタイムの英語授業

英語を話す人の少ない環境下で、学生の英語コミュニケーション能力を育成するため、スカイプ(インターネット電話サービス)やビデオ印刷物等、あらゆるメディアを使い、他国とのコミュニケーションに取り組んできた江口教授。その過程で、米イースト・カロライナ大学がおこなっていた、インターネット回線を使った音声と映像によるディスカッション(ビデオ会議技術)に着目。平成22年より、選択科目「多文化理解特別演習」が始まりました。

「時差も無くリアルタイムで交流できるビデオ会議は、教室がアメリカになったようなインパクトがあった」と江口教授。
時差の問題とともに壁になっていたのが、国によって異なる休暇等の年間スケジュールの調整でしたが、イースト・カロライナ大学が作成した手順に基づき、年間30回以上(一つの国で年間5〜6回)の共同授業をおこなうことが可能になりました。



今年の夏におこなわれたオープンキャンパスでは、10名以上の高校生がアメリカの学生との交流を深めた。

HAMADA Campus

地域とつながる 世界へひろがる

**浜田
キャンパス**

HAMADA Campus
<http://hamada.u-shimane.ac.jp/>



**学生たちが地域課題を発見・解決を目指す
地域活動への入口となる学内外での学習活動**



フィールド学習
様々なフィールドに出かけていき、現地を取材、調査することで、その地域の課題を発見し、解決策を見つけて提案します。



現地発表会
4つの合同ゼミでは、フィールド学習で学んだこと、見つけた課題等をまとめ、報告書を作成し、実際に現地の方達の前でも発表を行いました。



合同成果発表会
これまでの成果を様々な方法で展示し、学内外問わず、地域の人に活動の成果を広く知ってもらうため、発表しています。



学生のアイデアが形に
素材香房ajikuraの三上料理長とともに、浜田市や邑南町の地元食材を使ったイタリア料理を考案。観光客誘致や町興しの起爆剤として期待されます。

1年生全員を対象とした学外学習「フレッシュマン・フィールド・セミナー(FFS)」について、総合政策学部の田中恭子准教授と、地域協力者の邑南町レストラン「素材香房ajikura」三上智泰料理長にお話をうかがいました。

1年生の必修科目「FFS」とは、ゼミごとに様々な地域に出かけて課題を選定し、その課題に対する解決策を考察していく授業です。昨年度は、邑南町の「A級グルメ構想(※1)」を石見全域へ拡大展開させるというテーマに、4つのゼミが合同で取り組むという新たな試みも生まれました。

食を通じた地域活性化の成功例として学生たちに協力した三上料理長は、「地域交流や、食そのものに興味を持ってくれたことが嬉しかったし、何よりも学生と直接やり取りできたことが、私たちにとっても大きな刺激になりました」と手応えを感じておられました。

「FFSの主な目的として、学生には島根で学ぶことの意味を知り、地域への関心や興味を深めることで、学習のテーマを明確にしたり、将来の就業に向けての意欲や力を養成することに役立てて欲しいと思います」と田中准教授。

本学の大学COC事業(※2)の取り組みの1つであるFFSの活動を通して、学生たちが地域に Outreach、課題を発見・解決策を提案し、地域への関心を育むことで、この活動が地域に貢献する人材の育成へと繋がることが期待されます。

※1 生産者(食材)と料理人(調理)のこだわりによる感動の提供と、地域の農業や食に対する、愛着・誇り・自負心の創出を目的とした、「食」がテーマの地域おこし活動。
※2 文部科学省が「自治体と連携しながら、全学的に地域を志向した教育・研究・地域貢献を進める大学」を支援するために、平成25年度より開始した事業。本学では、3キャンパスの連携を強化し、地方自治体等と協働して、地域ニーズと大学ニーズのマッチングを図る場である「縁結びプラットフォーム」を構築。これにより、効果的な地域課題の解決を目指す。

お問い合わせ
■浜田キャンパス 地域連携課 TEL.0855-24-2396
<http://hamada.u-shimane.ac.jp/communication/community/>

「ひと」を支え「地域」を支える

出雲 キャンパス

IZUMO Campus
http://izumo.u-shimane.ac.jp/



高度な助産実践力で地域に貢献できる助産師を養成 「別科 助産学専攻」が来年度よりスタート

来春始動する「別科(※1) 助産学専攻(※2)」。

地域課題の解決に向けた、実践力重視のカリキュラムの導入等、新たな取り組みを、別科長就任予定者の狩野鈴子准教授のお話を交えて紹介します。

「別科 助産学専攻」の大きな特徴は、島根の各地域が抱える助産師不足をはじめとした課題に対する、「知識・理解の涵養」や、助産師外来や院内助産が増加する現状を踏まえた、「実践力、適応力の養成」に必要な各種カリキュラムの強化が挙げられます。

具体的には、新生児蘇生法の修了認定(救急対応)や、最新機器による超音波検査技法、分娩介助技術の向上といった、高度な実践力を養成するものから、周産期だけでなく、更年期や思春期等を含めた、女性のライフサイクル全般へ対応するための科目も盛り込まれます。

また、入試については、一般入試、推薦入試、社会人入試を実施し、なかでも、推薦入試・社会人入試では、島根県内や石見・隠岐地域へ就業する意志を持った人を対象とするなど、これまで以上に地域に根ざした「別科 助産学専攻」が始動します。



別科助産学専攻
(出雲キャンパス)
別科長就任予定者
の
狩野 鈴子 准教授



■ 講義・演習
地域で活動している助産師の方を招き、新生児訪問や思春期教育等の母子保健活動の現状等、現場の生の声を聞く機会を設けています。



■ 新生児蘇生法演習
機器の正しい使い方はもちろん、蘇生の初期処置、バグマスクを用いた人工呼吸、胸骨圧迫、気管挿管等、臨場感のある演習をおこないます。



■ 超音波検査技法演習
最新機器を用いた超音波検査技法演習では、最先端の技術を使って、より高度な医療技術を学ぶことで、実践に近い演習が受けられます。



■ 分娩介助技術演習
分娩介助技術演習では、分娩介助法の理論と技術について専用の機器を用いて、専門的な知識と技術を学びます。

※1 別科とは、本科とは別に設けた特別の技能教育を施す課程。
※2 平成24年度の看護学部設置にともない、短期大学部専攻科助産学専攻は平成26年度末で廃止し、平成27年度からは、島根県立大学別科助産学専攻を設置して、引き続き助産師を養成します。

お問い合わせ
■ 出雲キャンパス 管理課 TEL.0853-20-0200
http://izumo.u-shimane.ac.jp/

Research Report
研究レポート

ALS患者と想いを繋ぐ、意思伝達装置の研究開発

世界の著名人が続々と参加した「アイスバケツチャレンジ」で、にわかに注目を集めた、ALS(筋萎縮性側索硬化症)。この神経難病で苦しむ人々の生活を支援すべく、情報工学の技術を活かした、ALS患者の意思伝達装置の研究開発に打ち込む、加納尚之教授にお話をうかがいました。

機械式から脳波計連動式へ ALS患者と共同の研究開発

ALSという病は、精神的には健常者のまま、体の自由が奪われ、寝たきりになってしまう進行性の神経疾患で、今も有効な治療法がありません。

大学時代、当時の恩師が始めたALS患者用の意思伝達補助装置開発グループへの参加が、ALS患者と関わるきっかけとなり、これが加納教授のライフワークともいえるべき研究開発に発展していききました。

患者自身が操作する機械式に始まり、表情や視線等の感知式を経て、脳波計式にたどり着いた装置でしたが、恩師から加納教授へ研究開発が受け継がれた後、研究が進む中で新脳波が発見され、より洗練させた装置へと進化。平成21年には特許も取得しました。



研究に不可欠となる意思伝達補助装置。ディスプレイに文字を映し、脳波の反応を見て、ALS患者の方との意思疎通を図る。

逆境をバネに特許も取得 見据える今後と目標

「意思伝達装置について分かりやすくいうと、患者さんが心で念じることで、家電のオンオフができる装置です。例えば、「扇風機」等の単語をディスプレイに表示して、それぞれの動作(単語)に対応する脳波を特定し、スイッチと連動させることで、患者さんが「扇風機」と思うだけで、スイッチが入るという仕組みです(加納教授)

当初、この装置の仕組みが学会等に信じてもらえず、全国版のテレビ番組で取り上げられたことをきっかけに注目を浴び、論文が認められ、特許取得に至ったという加納教授にとって、この苦難の道のりが、そのまま研究の原動力になっています。

「今までの視覚連動から、触覚による連動装置の研究に着手しています。ALSの進行速度よりも早く、脳から指への信号経路を開拓したい」という加納教授の新たな論文が12月頃に発表されるそうです。



看護学部(出雲キャンパス)
加納 尚之 教授
■ 専門分野:リハビリテーション科学・福祉工学
統計学、情報処理学等の科目を担当。脳波を利用して、ALS患者の意思を伝達するための研究に力を入れている。



「事象関連電位を利用したヒトの心理状態等の判定装置」の名称で、加納教授個人で特許を取得。

「今までの視覚連動から、触覚による連動装置の研究に着手しています。ALSの進行速度よりも早く、脳から指への信号経路を開拓したい」という加納教授の新たな論文が12月頃に発表されるそうです。



「事象関連電位を利用したヒトの心理状態等の判定装置」の名称で、加納教授個人で特許を取得。

IZUMO Campus



地域の魅力や地域資源を見つけるべく、奥出雲町で行われた2泊3日の地域体験学の様子。



くびきメッセで開催された観光コンベンション。工藤准教授はコーディネーターを務めた。

総合文化学科の捉える観光学とは、地域の「小さな文化」の発見から地域活性化を考えていくことが大きな要素になると、工藤准教授は続けます。

「島根には、魅力的だけど、知られていないという地域がたくさんあります。」

**地域の魅力を発見する力を養う
観光学の今後の取り組みに期待**

総合文化学科の捉える観光学とは、地域の「小さな文化」の発見から地域活性化を考えていくことが大きな要素になると、工藤准教授は続けます。

今後の4年制大学化を視野に入れた、地域と学生との連携期間の長期化も、豊かな人間関係とさらなる発信力を生み出すと期待する工藤准教授。今後の展開が楽しみです。

**地域の魅力を発見する力を養う
観光学の今後の取り組みに期待**

総合文化学科の捉える観光学とは、地域の「小さな文化」の発見から地域活性化を考えていくことが大きな要素になると、工藤准教授は続けます。



観光文化ゼミで株式会社吉田ふるさと村を訪れた際の様子。

※1 地域と大学とが連携し、健康、保育、文化、観光などの切り口から、地域課題の解決に向けて活躍する専門職育成を目指す、大学COC事業の拠点。



総合文化学科(松江キャンパス)
工藤 泰子 准教授

■専門分野:観光学、近代観光史
様々な資料を用いて、近代の観光文化や制度に関する研究を行うほか、地域の文化資源を観光振興に繋げることを目指す。

Research Report
研究レポート

地域の「小さな文化」の発見から考える地域活性化

6月28日、松江キャンパス(しまね地域共生センター※)の主催で開催された「ご縁の国しまね観光コンベンションin松江」では、観光学の見地で意欲的なプログラムが披露されました。本企画をコーディネートした、総合文化学科の工藤泰子准教授に、観光学に関わる取り組みをお聞きしました。

独自の視点で開催された観光コンベンションの意義

初の試みとなった観光コンベンションは、松江や出雲といった島根観光の中心地ではなく、県全域から招かれたパネリストによるディスカッションや、石見神楽の特別公演等、「観光学」を授業に取り入れる松江キャンパス総合文化学科ならではの企画で開催されました。

「観光学とは、観光を研究対象に、統計学や社会学などの要素を取り入れ発展してきた学問ですが、近年では「地域資源」が観光学の大きなテーマとなり、各地で様々に取り組まれています。その観光学的な視点を含んで開催した今回のコンベンションでしたが、COC事業・地域プラットフォームを担う本学として、島根全体で観光を考えていくという独自性が出せたと思います。」(工藤准教授)。

MATSUE Campus



明日への力を蓄え 自分を創造する

松江キャンパス

MATSUE Campus
<http://matsuec.u-shimane.ac.jp/>



読み聞かせ授業を取り入れた教育活動の拠点 一般にも開かれた、絵本・児童書専門図書館



■ たくさんの絵本たち
蔵書数は約11,000冊。小さな子が読むものだけでなく、小学校高学年、中学生から大人まで、幅広い世代が楽しめる本が揃っています。



■ 読み聞かせの実践
授業の一環として、毎週日曜、学生が子ども達の前で読み聞かせを行ったり、「出前おはなしシェフ」として、学外での読み聞かせ活動を行っています。



■ 専属スタッフ
おはレス専属スタッフの尾崎智子司書と内田絢子司書。子どもからはもちろん、お母さん達からも人気があり、おはレスに欠かせない存在です。



■ ボランティア活動
被災地やカンボジア等へ物資支援のボランティアを行っています。こうした場面でも、学生と地域の方々との交流の場となっています。

平成23年から一般開放が始まった、絵本の図書館「おはなしレストランライブラリー」と、ライブラリーでの「読み聞かせ」を教育と連携させるユニークな取り組みを紹介します。

「おはなしレストランライブラリー」(通称:おはレス)は、地域の病院や、幼稚園・小学校に学生たちが出かけて、絵本の読み聞かせをするという独自かつ実践的な教育活動が、文部科学省の支援対象に選ばれたことで実現した、全国的にも珍しい大学附属の児童図書館です。

図書館業務の他に、ボランティアも活発におこなわれますが、読み聞かせと連携した教育活動が基本にあり、それが最大の特徴でもあります。

「読み聞かせを通した学生の総合的な人間力の育成が目標」と言う、おはレス代表の岩田教授。総合的な人間力とは、知識・技能・実践を総合して育む力のことで、人前で絵本を読むという得がたい経験が、学生の人間の成長を促す重要な役割を果たしています。

利用児童の顔と名前、読書傾向までも数百人単位で把握するという司書の尾崎さんを始め、関わる人材にも恵まれた「おはレス」。学生にも一般にも長く愛され受け継がれる取り組みになりそうです。

お問い合わせ
おはなしレストランライブラリー
TEL.0852-26-5563
<http://www.oha-res.com/index.html>

おはなしレストランライブラリー
尾崎 智子 司書



総合文化学科(松江キャンパス)
おはなしレストランライブラリー代表
岩田 英作 教授



学生活動紹介

**個性溢れる活動を発信！
地域を盛り上げる県大生**

学内にとどまらず、地域や県外へと活躍の場を広げている県大生。各学科やサークル活動を通して、地域活性化をおこなうべく、学内で学んだことを積極的に学外へ発信しています。各キャンパスを拠点に、学内外問わず活躍する学生に、活動に至るきっかけや活動内容について話を聞きました。



**保育学科の伝統行事「ほいくまつり」で、
学科生総出でイベントの企画運営を行いました。**
松江キャンパス 西中明日香さん（保育学科2年）

7月5日、保育学科生全員参加の手作りイベント「ほいくまつり」が県民会館大ホールで開催され、第41回目を数える今年も、大勢の親子をはじめ、保育関係者にご来場いただき、大成功を収めることが出来ました。ほいくまつりとは、私たち保育学科生の日頃の学習成果を歌唱、司会、影絵劇、劇を通して発表する場で、演者、裏方の計11パートの役割に分かれて取り組むものです。特に今年には40年の節目を越えたこともあ



り、ドライアイスによる演出をはじめ、劇では舞台上での表現が難しい場面のある演目を選んだり等、各パートが新しい取り組みにチャレンジした年での連携等、大変な面も多かったんですが、子どもたちからの反響も良く、それが何より嬉しかったです！この取り組みは子どもたちに向けたものですが、私たちにっては授業の一環でもあるので、この貴重な経験が、保育の現場に入ったときにしっかり活かせるよう頑張りたいと思っています。そして、この伝統ある行事がさらに進化したものになるよう、後輩達にしっかり引き継ぎたいと思います。



1. 保育学科全員で撮影した集合写真。 2. 公演中の様子。今年のキャラクターはタヌキとキツネ。事前の準備から全て学生の手づくりでおこなった。

**「てんしんはんがんを考える学生の会」は、
「がん検診」の大切さを伝える活動をしています。**
出雲キャンパス 辻本 裕子さん（看護学部2年）



私たちは「がん検診に行こう！」をテーマに、がんについて学習し検診の大切さを伝える活動をしているサークルです。島根県はがん検診受診率が低く、とくに乳がん検診受診率が47都道府県で最下位（平成19年）という統計結果に「検診すれば早期発見できたり治せたりするのにもったいない」と発奮した先輩方が平成21年に始動させた活動です。現在は、子宮頸がん検診の啓発活動「いなたひめプロジェクト」も合流して、約40名のメンバーがいます。勉強会、



1. 5月におこなわれた子宮頸がんについての学習会の様子。 2. 啓発活動の一環として地域の専門職の方々とチラシ配りをした際の1枚。

健康をテーマにしたイベントへの参加等が主な活動内容ですが、イベントでは、乳房モデルを使った自己触診の指導や、手作り紙芝居やグラフを用いてメッセージを発信しています。特に乳がんは、触診によって自分で発見できる唯一のがんでもあるので、乳房モデルでの指導には力が入りますね。この活動を通して、自分たちも学ばせてもらっているという意識が強いので、身につけた知識を正しく発信して、検診に行っていたらどうしよう、実際の行動に繋がる活動を目指しています。そして自分たちの将来のためにも、その成果をしっかりとフィードバックさせていこうと思います。

**よさこいサークル「橙蘭（とうらん）」は、
踊りで地域を盛り上げる活動をしています。**
浜田キャンパス 秋山 友志さん（総合政策学部3年）



よさこいサークル「橙蘭」は、海遊祭等の学内行事や地域イベントへの参加に留まらず、「よさこい」を踊らせてくれるなら！と県外にも出かけてしまうくらい、よさこいが大好きなメンバー約50名で構成された、浜田キャンパスでも指折りの元気なサークルです。

地域での活動は、市民の方々との交流促進という意味合いもありますが、



よさこいで地域活性化にひと役買った！という思いも強いので、規模の大小関係なく、各種行事に出かけていきます。ありがたいことに呼んでいただく場合が多く、例えば保育園の園児たちによさこいを教える等、活動の幅も広がっています。

県外活動では、今年3月には熊本のよさこい祭りに参加して、オリジナル曲を使ったよさこいも披露してきました。この後も海遊祭を皮切りに、佐世保や京都等、県外遠征が盛りだくさんです。

いろいろなタイプのメンバーが集まっている「橙蘭」ですが、「踊りたい！」というシンプルな思いは共通で、よさこいでみんながひとつになれる楽しさが、このサークル活動の原動力だと思います。



1. 県立大学運動会での演技の様子。県内のみならず、県外からのオファーも増えている。 2. 一緒に踊るメンバーでの集合写真。

島根県立大学未来ゆめ基金へのご協力に心よりお礼申し上げます。

『島根県立大学未来ゆめ基金』につきまして、平成26年4月1日から9月30日までの間に、下記のとおり個人57名、法人・団体等6名の皆様から総額640,000円のご寄附をいただきました。皆様のご協力に厚くお礼申し上げます。
ご寄附をいただきました皆様に感謝し、ここにご芳名を掲載させていただきます。

【個人からのご寄附】

| | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 青木 望 | 大矢 敬子 | 上代 勇夫 | 羽山 敦司 |
| 青木 正美 | 荻野 康彦 | 白根 孝朗 | 原 悦雄 |
| 天川 竜治 | 小田 良将 | 陶山 浩史 | 藤田 満穂 |
| 荒本 省三 | 勝部 恵治 | 高橋 千里 | 堀 正彦 |
| 家本 賢 | 神岡 忠信 | 田上 尚志 | 松本 良雄 |
| 石原 祥樹 | 佐々木 清 | 永井 孝 | 松本 義広 |
| 磯岩 剛 | 澤 美智男 | 長瀬 清隆 | 村岡 勲 |
| 岩本 要二 | 繁岡 哲也 | 橋本 秀則 | 湯川 精一 |

【法人・団体等からのご寄附】

| | |
|-------------|------------|
| 株式会社御船組 | まるなか建設株式会社 |
| 整体施療所癒しの手の会 | 有限会社装巧舎 |
| 東京靴株式会社 | 和幸電通株式会社 |

※五十音順、敬称略
※ご寄附をいただいた皆様の中で、ご芳名の公開を希望されない方につきましては掲載しておりません。
※申込書は本学ホームページにも掲載しておりますが、郵送いたしますのでお問い合わせください。

事務局財務課 TEL:0855-24-2218



申込パンフレット



看護学部2年次生を対象に「マナーアップ講座」を開催しました。



グループワークもあり、活発な雰囲気の中おこなわれ、今後には活かされると学生からも好評であった。

キャリア支援講座として毎年行っているマナーアップ講座。今年度も、6月25日、ラ・ポール株式会社 福岡かつよ氏を講師に招き「第一線で活躍する医療人になるために」というテーマのもと、看護学生としてふさわしいあいさつや、態度、身だしなみについて学びました。
セミナーに参加した学生にとって、医療人としての接遇の大切さを理解し、これから始まる病院実習に向けて自己を振り返って考えるための貴重な機会となりました。



各キャンパス食堂において朝食会を開催しました。



学生食堂で朝食をとる学生たち。この朝食キャンペーンをきっかけに、朝食を摂る習慣がついたという声も学生からあがっている。



朝食を摂らない学生の増加をうけて、各キャンパス後援会の支援事業で「朝食改善プロジェクト」を実施しています。食の大切さや1日の体調への影響を考え、生活改善の必要性を認識してもらうとともに、島根県産の食材を使用し、そのおいしさを知ってもらうことを目的としたものです。浜田では、毎月3週目の朝食キャンペーン中に、朝食代を割引しています。また、今年6月には、浜田の魚や野菜を使ったクッキング教室を開催しました。松江・出雲では、平成25年度に島根県が行った料理コンクール「わが家の一流シェフ in 島根」のレシピが提供され、県内産の牛乳や卵などの食材が使用されました。

News & Topics

県大の今がわかる! ニュース&トピックス



PRESENT

ご意見・ご感想をいただいた皆さまの中から抽選で10名様に、P13で紹介されている「ゴーストみやげ研究所」が商品開発した「ほういちの耳まんぢう」を1箱プレゼントします。ご意見は、本誌差込ハガキまたは、メールにてお寄せください。

※当選者のお知らせは発送をもってかえさせていただきます。
※応募締切/平成27年1月6日必着

■メールでの投稿はこちら
島根県立大学 広報誌オロリン事務局
E-mail:kikaku@admin.u-shimane.ac.jp



海外から研修生を受け入れ 夏期日本語・日本文化研修を実施しました。



今回の研修に参加した学生たち。県東部や広島県への視察では、実際に目で見て多くのことを学んだ。

6月30日〜7月11日までの約2週間、ロシア国立研究大学 高等経済学院、柳韓大学校、蔚山大学校、安徽財経大学、台中科技大学の5大学から11名の研修生を受け入れ、「夏期日本語・日本文化研修」を実施しました。研修は、本学と地域を知り、研修生と県大生、地域の方々との交流促進を目的としたもので、日本語学習をはじめ、石見神楽鑑賞・茶道等の日本文化を体験したほか、津和野高校や公民館を訪問し地域住民との交流も行いました。



学生達の夢が形となって 産学共同開発商品が誕生しました。



島根町産のいちじくを使ったジャムを入れ、ピンク色の生地で包み、かわいい耳の形に焼き上げています。「ゴーストみやげ研究所」は、「小泉八雲が怪談の舞台とし、その史跡が残る松江市中で、訪れた方の思い出に怪談のお土産を持って帰っていただきたい。そして、松江の観光に役立ちたい。」という想いのもと、今後も、斬新な商品を生み出すために活動をおこなっていきます。
「ほういちの耳まんぢう」は、島根県物産観光館、シヤミネ松江、美肌マルシェ(玉湯町)等で販売中です。

1.総合文化学科1年の大崎さんをリーダーとする「ゴーストみやげ研究所」のメンバー。 2.「ほういちの耳まんぢう」は8個入り600円(税別)で販売中。 3.小泉八雲の命日である9月26日におこなわれた新商品発表記者会見。ゴーストみやげ研究所のメンバーと小泉見教授。 4.「ゴーストみやげ研究所」ロゴマーク
「ゴーストみやげ研究所」ホームページ <http://goastlab.jimdo.com/>



編集後記

広報誌オロリン第3号をお読みいただきありがとうございます。

今号の特集では、10月に開設した国際交流センターに関連して、センター長へのインタビューや各キャンパスでの交流事例を紹介しました。また、浜田キャンパスのフレッシュマン・フィールド・セミナーや、松江キャンパスのおはなしレストラン等の取り組みのように、大学での研究の成果を地域へ還元している様子を報告しています。地域で、そして世界でも輝く学生の姿はいかがでしたか。広報誌に関するご意見、ご感想をお待ちしております。「オロリン vol.4」は来年5月発刊予定です。どうぞお楽しみに!